
境界線上の幻想郷

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の幻想郷

【Nコード】

N7538Y

【作者名】

葛根

【あらすじ】

たぶんハーレムになると思います。

時空系列など気にしたら負け。

基本的に軽いノリで読んでいただけると助かります。

なお、原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第一章 境界線内の幻想達（前書き）

独自の解釈やキャラ崩壊がありますのでそれらが気になる方にはオススメしないです。

それでもいいよって方で、読んでもいいよって思っていただける人は続きをどうぞ。

第一章 境界線内の幻想達

● 霧雨魔理沙とパチュリー・ノーレッジの間に男がいる。

紅魔館の図書館、その一角にテーブルや椅子があり、さらにはソファーや簡易ベッドまである。

何故、二人の間に男がいるかという疑問に答えるなら、二人に取ってその男は必要な人間だからだ。

●

「所でツムグ、まだ、霊夢の神社に居候してるの？」

「そうだぜ。人里で家を借りる。いや、香霖堂に世話になれよ」

何度かこのやり取りはしたことがある。

しかし、答えはいつも同じで

「霊夢は放っておくと碌な食生活しないし、怠けるし、腋だしてるし。ま、放って置けない駄目娘^{だめこ}なんだよ」

博麗霊夢は自堕落な駄目巫女だ。

幻想郷において重要な役割を果たしているはずなのだが、本人はあまり判っていない様子である。

異変が起きている時の勘の良さと働きっぷりの一割でもいいから平時の時に分けると言いたい。

だから、変態八雲紫に馬鹿にされるのだ。

「放って置けないってなあ。アレはもう直らないんだぜ？」

「ひどい事いうなよ。月に一回位は神事だって、やるようになったんだ」

以前は思いつきでやる程度の神事を月一に行うまでに改善した。

とはいえ、人里にふらりと訪れて占い屋みたいなことをすることもあれば、悩み相談を聞いたり、妖怪の話を聞いたりする曖昧な仕事だ。

実際、神事に関わる^{みそぎ}禊やお祓いは幻想郷においてあまり重要ではなかったりする。

なにせ人間と妖怪が共存しているのだ。

宴会を神事に含めるのなら割りと働いている事になる。

大宴会などは異変解決後に行うし、毎日妖怪の誰かが博麗霊夢の食事、というか俺の料理を食べに来るのだが、それを神事と言っているのだろうか？

頻度が高いのが亡霊である西行寺幽幽子なので、神事のお祓いに当たる仕事だといえは言い訳になるのだろう。
食うだけ食って帰るし。

「え？ あの霊夢が？ そんなバカな？！」

パチュリーが驚愕している。そんなに驚かなくても。

いや、駄目巫女の噂は既に殆どの妖怪や能力持ちの者に伝わりきっている。

俺は何人にも同じような話をしたが信じられないという顔をする奴らばかりだ。

敵は多いぞ、霊夢よ。

と、思い出す。紅魔館の図書館に来たのはパチュリーに呼ばれたからである。

この幻想郷の癖のある奴らと話すとどうも脱線する。

「ところでなんで俺を呼びつけた？」

「え？ああ、貴方の能力が必要だからよ」

「そうだぜ。これから、魔法研究というなの実験をやるからな。ツムグの【力を分け与える程度の能力】があると助かるんだぜ？」

要はタンクになれということか。

はいはい、どうせ、俺には戦う能力がないですよ。なにせ、能力が力の供給だ。魔法タンクとか、霊力タンクとか呼ばれてますよ！こいつらには内緒だが、守矢の神社の奴らに執拗に付け狙われているんだぞ。

諏訪子と神奈子にも力を、神力を与えられるとバレてしまっているからな。

二人とも全裸耐性が付いており、厄介だ。

東風谷早苗には耐性は付いておらず、久々に初々しい反応を見た。幻想郷において全裸ネタを通じる人物は少ない。

俺の心のオアシス！東風谷早苗！

霊夢然り、魔理沙、パチュリーに全裸ネタをしたことがある。

股間の部分は魔力と霊力でばかりの入れた状態だったが、三人とも冷めた反応であった。

霊夢は

『で？ 昼食なに？』

だったし、パチュリーは

『ああ、魔力と霊力の複合技術ね？ 全く無駄な技術ね』

と分析するし。

魔理沙は

『？ 死ねよ？』

だった。

意外にも、風見幽香が乙女だった。

あの時の恥らう顔とマスタースパークの威力は忘れることはないだろう。

半死の全裸状態の俺を拾って博麗神社まで届けてくれた射命丸文には文々。新聞購読という行為で現在進行形でお礼を返している。

●

適当に魔力供給して、俺には理解のできない魔法実験を行い満足気に二人して俺に微笑んだ。それをお礼と受け取り帰宅することにした。

魔理沙は泥棒稼業から足を洗ったらしい。

一時期、俺が紅魔館でレミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットの面倒を見るというバイトをしていた時期にパチュリィに頼まれて魔理沙を挟撃した。

その後、話し合いの結果、紅魔館図書館でパチュリィと魔法を研究、技術協力したほうが、効率よくね？ということとで落ち着いた。パチュリィの愉悦した笑みは触れてはいけないと思った。

フランドール・スカーレットに対しては少々、というか、狂っていたので常識力とか知力とか認識力とかコミュ力などをバランスよく供給することにより、“普通”を学習させていたのが功を奏して今では姉妹揃って時たま出かけるまでになっている。

十六夜咲夜はこの事に関し、

『私の萌え成分が増えたことに感謝します』

など戯言を述べていたので、常識力を供給しておいた。

もちろん、変化などなかった。ロリコンであり、変態紳士であってそれが彼女の常識なんだろう。

紅美鈴の乳とパンツを見に用事もないのに度々紅魔館に訪れる俺もどこか常識というものが欠けているのだろうか？

いや、紅美鈴が居眠りの最中に服を多少ズラしたりめくったりする程度では起きないのが悪いのだ。

最中に目覚められるとお話と言う名の肉体言語を用いてくるのでその時は逃げるに限る。

俺の奇襲が何度か会った後、彼女はついに居眠りをしなくなってしまった。

そうではない。俺の発する気を覚えて、俺の気が近づいた時のみ起きるようになったのだ。

『来ましたねー？私、寝てませんよ？ええ、貴方の気は覚ええましたからね』

俺だけに反応しているのは駄目だと思う。

「あら？ もう帰るの？」

レミリア・スカーレットだ。

毎回思うが、500年以上生きているとは思えない。

美少女であるが、『私、レミリア・スカーレット。小学5年生』と言ってもまるで違和感がないと思う。

実際、その位の年齢に見えるし、10歳と言われても信じるだろう。初めて会った時のカリスマ性はどこかに行ってしまったようだ。レミリアにも全裸ネタは通じなかったな。

初対面で全裸ネタやったのに

『ふっ』

と微笑を浮かべて弾幕撃ってきたっけ。

「夕食を作らないとウチの駄目巫女が怒るからな」

「まだ、霊夢んとこにいるのね。父親？　というのは失礼ね、面倒見のいいお兄さんと言った所かしら。お兄さんと言えば、フランがお兄ちゃんが欲しいと言っていたわね。そうね。貴方、フランの兄ね。あら？　そうなると私の兄にもなるのかしら？　それとも弟かしらね？　霊夢達と年も近いし、やはり弟ね」

また、勝手に話を進めて決定しやがる。

「フランも確実に俺より年上だが？」

「いいのよ。フランが兄と思うなら兄で」

妹が全てに優先されるルールらしい。

「それより、他人行儀な喋り方はよしなさい。私達は兄妹なのよ？」

「兄妹は決定なんだな？！」

スカーレット姉妹は家族愛に餓えているのだろう。

友達は最近増えているみたいだが、家族に見せる素の自分というものを模索していると予測。

咲夜は姉と振舞っているが、まだまだ、足りないであろう。

甘えたい年頃というには随分な年数を積み重ねているが、容姿的には親に甘えている年頃だ。

「はあ、好きにしる。明日、博麗神社に遊びに来るといい」

「そうね、フランと私、咲夜とパチュと美鈴で行くわ。またね。お兄さま？」

カリスマを気取っているなあ。

抱っこしてお別れの挨拶をして紅魔館を出た。

「お帰りですねー？ では！」

「おう、じゃあの」

美鈴は俺を客として扱わないので気軽にいい。門から数歩の所で飛んで帰った。

第一章 境界線内の幻想達（後書き）

東方MMD射命丸 文の白玉楼突撃取材など見たら書きたくなくて書きました。

第二章 食事場のジャイアニズム（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第二章 食事場のジャイアニズム

●
伊吹萃香がいた。

博麗神社、霊夢の自室に当たる部屋に勝手に入り込んで既にアルコールを飲んでいた。

霊夢はこの時間夕食の材料を人里に買いに行っているはずである。よって、今、この瞬間、この場合、霊夢の部屋にいるということは不法侵入したということだ。

「おうゝ、摘みは？」

「ねえよ」

「えゝ、摘みい、摘みい！」

ガシガシと腕を左右に振られる。

力を加減されているが、こちらが摘みを出すというまでは絶対に離さない気だ。

この美少女もまた、妖怪である。

怪力の持ち主で、俺の腕を握り潰す事くらい簡単にやってのける。腕を握り潰してしまったら摘みが作れないから握り潰さないのか、それとも実力者として認められているのか。

まあ、前者だ。

しょうがねえなあ、と前置きし、

「干し柿と漬物で我慢しろよ？ 夕食は食っていくのか？」

「わーい。食う」

アルコールの入った瓢箪と頭に生えている二本の角がなければ子供に見えるだろうな。

餌付けされた鬼は手間が掛かる。

しかし、萃香には博麗神社の地酒、“博麗酒”の元になる酒虫のエキスを分けてもらった恩がある。

エキスを塗った瓢箪から創りだされる酒を100倍ほど薄めることで人間でも飲めるアルコール度数になっている。

ただの水から酒ができるので儲かる。

何せ何年も寝かした酒より博麗酒の方が、うまいし安いのだ。

萃香は薄めるなんてトンデモナイなど言っていたが鬼と人間ではアルコール耐性が違う。

「ふおういへば……、んぐ、ぷはあ。そういえば、守矢神社とこの早苗がフラッとココに来てツムグさんいませんか？　って聞かれたからいせんよって答えたら帰っていったぞ？　アレは何だったんだろうなあ？」

「なあに、気にするな。ダダの常識に囚われていない痛い少女だ」

ついに本陣まで侵入してきたか！　信仰の代行者め！

霊夢不在の隙を狙っていたのか、天然で現れて奇跡的に霊夢が不在だったのかわからないが、前者なら行動パターンをどこかで監視していることになり、後者なら能力だ。

信仰の代行者。

守矢神社の住人で、現人神だ。

奇跡を起こす程度の能力の持ち主である。

自信に満ち溢れた行動力と天然が売り。なお、オパイはボイン。

「なんだあ？　その憐れみの目は？」

「これが持たざる者が……」

薄いな。

霊夢は慎ましやかに並。

メイド長も並。

PAD疑惑は俺が命を賭けた乳揉で解決した。

あの時は、うん。レミリアに救われたが、大きな代償を払ったな。

紅魔館の掃除だったり、メイド長に長期休暇を与える代わりに俺が代行してメイドの仕事をした。

その時に戦利品として各自の下着を手に入れたが、香霖堂を経て闇市場で高値がついた。

森近霖之助が本物であると鑑定書までつけて売りさばき、売上の7割ほど持っていていかれた。

紅魔館の七不思議の一つ”消える下着事件”の犯人は主犯、俺。共犯、霖之助だ。

事件は迷宮入りしたが、もう二度と同じことがないように、厳重な防壁を作られた。

そんな事を思い出しながら萃香と適当に話をしていたら、家の主が帰ってきた。

「あれ？ 萃香も来てたんだ」

●

博麗霊夢の横には、四季のフラスターマスターの二つ名を持つ人物。

風見幽香がいた。

彼女は伊吹萃香と同じく気まぐれで博麗神社に遊びに来る。

霊夢とお茶を飲んでいるのを見かける事が多い。

お茶会のようなものである。お茶会のある日は必ず夕飯まで一緒に食べて、宿泊していくのだ。

何故か、霊夢と幽香と一緒に風呂まで入るが理由は聞かない。同性同士なのだから別に問題ないのである。

萃香と幽香。似た名前であり、お互いに顔見知りになり、今では仲も良い。妖怪同士何か通じるものがあるのだろう。

幽香は萃香を妹のように可愛がる節がある。萃香も別に嫌がりはず、されるがまだ。

実の所、昔、二人はガチバトルしたことがあるらしい。

その後、しばらくお互いに干渉だったが、霊夢が現れ、二人共、霊夢に倒された。

そして、博麗神社に再戦として乗り込んできた時に萃香と幽香が鉢合わせになり、その時に色々なやり取りがあり、今に至る。

風見幽香には痛い目に合わされたことがある。

一度目は初対面で全裸で遭遇した時だ。

あの時俺は幻想郷を隅々まで冒険するという生活をしており、大体の妖怪には全裸で対応していた。

当時の服は俺の意思でパージ可能な特別な服で一瞬にして全裸になれるという機能が付いていた。

しかし、幽香にソレを見せた際に俺ごと、マスタースパークで吹き飛ばされてしまった。

俺は助かったが、服はボロボロになった状態で河城にとりに回収されてしまい、きゆうり30本で修理、追加きゆうり100本で譲って貰い、今は箆笥たんすの中に仕舞ってある。

二度目は霊夢に男がいるという噂を聞きつけた幽香が博麗神社に行き成り現れた時だ。

俺が博麗神社に居候を始めて二ヶ月位の頃だったはずだ。

霊夢と協力して幽香を戦闘不能にまで追い込み何とか理解を得た。

『力を分け与える程度の能力ねえ。それで？ 霊夢に協力して異変を解決？ それが続いて気付いたらお互いが意識し始めて、男女の仲に……！』

再熱した幽香だった。

が、俺がいる限り、霊夢には無限に近い霊力が供給され続ける。再度、落ち着かせる為に戦いついには、

『っ……。厄介ね。貴方の能力。疲れたわ』

疲労したとは思えなかったが、戦闘後の恒例？ の宴会で誤解は解けた。

どうも、俺の料理が気に入ったらしい。

その後も、花の世話を手伝ったりして幽香さんのご機嫌伺いをした。

『なるほどねえ。ツムグの能力で花に”生命力”や、病気への”抵抗力”を分け与えることで花を管理できるわけね』

フラワーマスターの名の通り。花の世話が好評であった。

花の鑑賞も好きだが、幽香のオパイも好きである。

サイズの上位存在であり、美人であるから見応えは抜群だ。

俺の視線に気付いて、

『？ 別に減るものではないからいいけど。ほどほとにしときなさいよ？』

許可が出たと受け取り、鑑賞は現在も継続中である。

●

夕食後、四人で茶を啜り、月を見ながらの晩酌はなかなかオツなものである。

美女一人。美少女二人。

幻想郷の女性は美人が多い。

能力持ちの人間、妖怪は全員が美人、美女、可愛い、萌えるの成分を含んでいる。

改めて、思う。美女との晩酌は時間の経過が早い。

数時間前に、霊夢は萃香の酒を飲まされて死んだように眠っている。萃香もからかう相手がいなくなったのと腹が膨れたので寝ると言って霊夢と共に一緒に布団で寝てしまった。

日付が変わろうとする時間だが、幽香と俺は日本酒を飲んでいた。

「ねえ？」

「ん？」

●

風見幽香は思う。

この人間は変わっている。

戦闘能力はその辺の人間と同じだ。

能力でなんとかしているらしく、多少、強めに殴っても平気であるが、スペルカードを使った所を見たことがなかった。

妖怪に相対する時、人間はスペルカードを使用する。

しかし、ツムグは妖怪に対してスペルカードを使ったことがあるという話は聞かない。

ブン屋曰く、

『貴女が原因でもありませんね。彼に危害を与えると博麗の巫女が報復に来ると、そういう噂です』

卑怯だと若干思うが、アレは負けたのではなく、面倒臭くなった。戦い続けるのも悪くないが、こちらは疲労していくのに対し相手は疲労しない。

更に、消費するはずの力が供給され、永遠に戦えるのだ。それが理

解できたから面倒臭くなった。

ツムグに焦点を置いて攻めれば恐らく勝てるだろう。ソレをしなかったのは、要になるツムグに対して霊夢が何もしていないはずがないと思っただからだ。

後日確かめたらやはり、防護符を持っていた。

ツムグを攻めれば霊夢に隙を与えることになり、こちらが負けてしまう。

霊夢を倒すとなるとコレまた供給があるため、長期戦の末こちらが負けてしまう。

卑怯ね。

一定の能力持ちと組むことで幻想郷で強さのイニシアチブを握れるはずだ。

それをツムグが望まないとしても傀儡として操ってしまえば、無限供給される力を手に入れる事ができるというわけだ。

幻想郷を支配しようとする考える妖怪は殆どいないだろうが、疑問に思ったことがあった。

「幻想郷で勝てない相手はいるの？」

もちろん、ツムグだけなら勝てない相手の方が多い。

「いるよ」

酒が回っているのか随分素直に答えてくれた。

「誰？」

「八雲紫」

なるほど、と思う。彼女は確かに強いのだろう。

萃香の友人である。知り合いであるが戦ったことはない。

相当古い大妖怪である。

「実際、境界を操る程度の能力は何でも有りだよ。力を分け与えるには対象を認識して意図的に分け与えているわけんだけど、認識の境界をめちゃくちゃにされるか、力を分け与えているラインの境界をいじられるか、俺自身の存在の境界を操られたら終わりだ」

それに、

「生と死の境界を操られたら一瞬で死んじゃうよ」

酒を少し飲み、喉を潤して、

「それを誰にもしないのは紫が幻想郷を愛しているからだと思う。気に入らないからと言って虐げてしまったら全てを受け入れる幻想郷が嘘になる。それは八雲紫のしてきたことを否定してしまう。と考えているのか、ただ面倒臭がりなのか。

掴みどころがないが、それも紫の良い所だと思う。胡散臭い口調の時は照れ隠しだったり、裏にある意図を読ませないための行為だろうね」

「なるほどねえ」

感心する。

なかなか思慮が深いらしい。

やはり、手に入れよう。

「ツムグ、私のモノになりなさい」

「――」

驚いた顔も面白い。

正直に思えば、ツムグを気に入っている。

私の【花を操る程度の能力】で秘密にしていることがある。

それは、花や植物の声が聞けることだ。

花達はこちらから話かけるとそれに答えるように声を発するのだ。
しかし、花から自発的に声を発することがあった。

『この人、暖かい』

『お礼、助けてくれた』

『命大事にする』

普通の人なら気にも止めない道端の弱っている花にツムグが能力を使い元気にしたり、森で食べれる物を採取している時には多くの動植物に能力で力を分け与えているそうだ。

優しいと言っか、馬鹿だ。

だからこそ、気に入ったのだろう。

霊夢も可愛いが、コイツもなかなか良い所が多い。

手に入れてマイナス面がない。

それどころか、手に入れてしまえば、霊夢がおまけで付いてくるだろう。

退屈することが無くなりそうだ。

「酔ってるな」

「あなたにね」

霊夢と同じ、たまには勘というモノに身を任せてみようと思う。

私の勘はツムグを手に入れば面白い事になると告げている。

ツムグに身を寄せると、彼を、

「そんなに飲んだか？ いつもならこれ位で酔う奴じゃないだろ」

「言っただでしょ？ ツムグは私のモノなのよ？ わかる？ 貴方の

モノは私のモノ。私のモノは私のモノ」

押し倒した。両腕の手首を掴み、馬乗り状態になる。

ツムグは驚いた顔をしている。遅れて抵抗してきたが、力で私に敵うはずもなく、

「悪酔いだな……」

「どうかしらね？ 本当は解ってる癖に」

首筋から舌で擦る^{くすぐ}ように舐め上げて、頬を伝い、唇を奪い、舌を無理やりねじ込む事で口内を蹂躪した。

内心、強姦しているが立場が逆だね。と思う。

一分程蹂躪を楽しむと、股に確かな熱さを感じた。男性が気持ちよくなると硬くなるモノだ。

「んっ、やめっ」

辞めるどころか、もっと激しく舌を動かした。

彼の舌を吸い上げて唇で激しく扱く。

扱きながら舌も使う。

さらに、股にある熱い硬いものを擦るように腰を動かした。

この行為でますます彼の抵抗が強くなったが、両腕はがっちり固定してある。

また馬乗りの要領で腿で彼の腰辺りを挟みバランスよく乗る。

彼の両腕を私は左手一つ抑えつけることにして、開いた右手で彼の服を破り、脱がす。

「――」

何か言いたげだが舌を吸い上げられており、言葉を発することがで

きない。

一方で、私も下着をずらす。
服を脱げないが、月の見える廊下だったので、彼の表情がよく見えた。

•

レイプは犯罪です。

配点：（警告）

•

第二章 食事場のジャイアニズム（後書き）

作業BGMは東方JAZZ

第三章 幻想の協力者（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第三章 幻想の協力者

満月の夜。

神社の長廊下に男女はいる。

男は寝転がっており、その上に跨る格好で女はいた。廊下を軋ませる程の上下運動が繰り返されている。

男女の表情は対照的であった。

男は泣いているような顔で、女は狂気を含んだような笑顔である。女が身体を震わせ、痙攣する。それに合わせるように男も身体を震わせ痙攣した。

幾度も痙攣を繰り返し、果てる。

果ててはまた、女が動き出し、廊下を軋ませる。

それを何回も続け、ついには男女の格好が逆転する。

水気を含む音が響き、また、果てる。

お互いに抱き合い、座った状態で再度動く。

女の足が男の腰に纏わり付く様に絡まり、男の足の上に座った女は満足気に唇を吸う。

着衣していたはずのものはなく、お互いに裸である。

抱き合い、座った状態で互いに痙攣し合う。

身体の一部が繋がったまま、状態を変え、女は犬のように俯せになり、男は激しく腰をぶつける。

今度は水と肉体がぶつかる音が響く。

あらゆる状態でお互いに快樂と、疲れに溺れ最後にはやはり、女が男に跨り、果てることになった。

異変に気付いたのは博麗霊夢であった。
いつもなら朝ご飯の匂いで起きるはずが、異臭で起きた。
アルコール臭だ。

昨晚、いつの間にか寝てしまったと曖昧な記憶を辿る。
布団には酒臭い萃香が寝息を立てていた。

なるほど、原因はコイツか。

しかし、ツムグも寝坊か、珍しいこともあるものだ。

日は昇っており、昼前位だろうか。

布団から起き上がり、顔を洗う。

服を着替えて水を飲む。

ふと、廊下に出た所で、完全に覚醒した。

「何？ これ……」

ツムグの服らしきものがボロボロになって放置されていた。

廊下には服以外のものはなく、清掃されたような痕跡と花の臭いが漂っていた。

幽香も来ていたはずだが、いつの間にか帰ったのだろう。

廊下の清掃は酔って何かこぼしたのだ。

「……。な、訳ないか」

「んー？ どうかしたのかー？」

起きたばかりの萃香だ。

博麗神社に感じる気配は私と萃香以外には無い。

本来いる筈のツムグの気配が無い。

幽香の気配も無い。

これらから導かれる答えは……。

「萃香、事件よ！」

●

【号外！ 博麗神社の居候、ツムグ氏拐われる?!】

文々。新聞の見出しである。

昨晚ツムグ氏が何者かによって拐われた。

記者こと、射命丸文が昼、博麗神社に訪れた際の、博麗霊夢氏は狼狽していた。（以下、霊夢氏）

詳しく話を聞くと、霊夢氏が目を覚ますとツムグ氏がなくなっていたようだ。

博麗神社の陰の支配者と噂のツムグ氏を誘拐した人物とは一体何者であろうか？

霊夢氏は語る。

昨晚、夕食時には、四人の人物がいた。

一人は霊夢氏、残りは伊吹萃香氏、風見幽香氏、ツムグ氏である。

その内、風見幽香氏とツムグ氏がなくなった。

また、ツムグ氏の衣服と思われるものがあり、その衣服はボロボロに破かれていた。

出血などの痕跡はないが、最後にツムグ氏がいたであろう場所には証拠隠滅の痕跡があり、事件性が高いと思われる。

なお記者は居なくなった風見幽香氏を追うべく風見幽香氏自宅へと向かう。

今後の文々。新聞の真相解明を期待して欲しい。

次号！ 特派員、射命丸文は事件の真相に迫る！

●
射命丸文は喜んでいた。

無論、事件にあった人物に対してではなく、自分の新聞が好評であったからだ。

紅魔館、永遠亭、香霖堂などで非常に好評であった。

人里にも配っており、上白沢慧音も驚いた様子であった。

まさか、守矢神社が購読してくれるとは思わなかった。

何気に、すごい人脈ですね！。

さて、風見幽香氏の自宅に付いたのだが、誰もいなかった。

「どういうことでしょう？」

とりあえず、写真を撮り、新聞のネタ帳にメモを書き込む。
自宅は昨日から空いている事になる。

帰ってきた痕跡がなく、風見幽香が犯人だとするなら、計画性の高い仕組まれた誘拐かと思っただが、突発的に思いついたようだ。
そうになると、ツムグの安否が心配になる。

計画的な誘拐なら命に別状はないだろう。何かの犯行声明なり、要求があるはずだ。

しかし、突発的な出来事だと、最悪、ツムグは食べられているかもしれない。

妖怪の本能に従えばそうなる。

未だに風見幽香からの要求も反応もない。

そこから考えられることは、

- ・ツムグを食べてしまい、まずいと思い、逃げた。
- ・ツムグを食べるために誘拐されたことにしている。

- ・まさかの、駆け落ち。
- ・計画的な犯行を突発的な犯行に見せている。

3つ目はないな。恋愛感情があるとは思えない。少なくともツムグにはないだろう。

可能性が高いのは1つ目。

2つ目は風見幽香自身がいなし、別妖怪が誘拐したと言う発言がない。

4つ目だと事件解決させようとする意図が見える。

となると、裏では妖怪の賢者辺りが動いている可能性がある。

巫女に試練を与える名目で風見幽香と協力しているかもしれない。

「なににせよ。情報が足りませんね」

少なくとも計画性のある犯行なら、自宅の荷物が減っていたり、留守にするための準備があるはずだ。

しかし、それがない。

つまり、急ぎで情報を入手する必要がある。

犯行現場であろう、博麗神社に再度向かう。

●

「で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそうね。霊夢に試練とでも言えば良いわ」

●

風見幽香にとって僥倖だったのは、ツムグの人脈の広さであった。

行為の後、朝日が見え始めた時にツムグは気を失うように寝た。

そのまま、睡眠性の臭いを出す花を操り、寝かし続けることにした。

事後の処理として廊下を清掃し、自分は服を着て、証拠をある程度残しつつ、ツムグを抱え博麗神社を撤退した。

自宅で霊夢を迎え撃つのも良いかと思っていた矢先、八雲藍に出会った。

「あの、その全裸はツムグさんですよね？」

「ええ」

口が弓が曲がる様に釣り上がるのを自覚しながら八雲藍を脅して、八雲紫宅に招待させた。

八雲宅に付いた時は片手に八雲藍、もう一方にツムグを抱えた状態だった。

それを見て驚いた橙が八雲紫を叩き起こし、交渉になった。

「藍を人質に交渉ねえ。で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそうね。霊夢に試練とでも言えば良いわ」

「ううう、藍様あ」

「ちえええん！」

うるさいわね。

まあ、人質になるとは思っていないけど。

ツムグを起こして交渉役にしようかしら？

「遅からず、持って2日だけど？」

「それだけあれば十分よ」

ふーん。という言葉とこちらを値踏みするような視線であったが、敵意はなかった。

「童貞は奪われたみたいね。条件はツムグをこちらにも”貸し”なさい」

ツムグも初めてだったのか。

貸す、か。できれば2日の内に墮落させて虜にさせる予定なのだが、八雲紫の能力があれば、色々と楽できそうだ。損得勘定と効率面で見ればお釣りが来るか。

「その位は承認するわ。その代わり——」

●

紫様と風見幽香の顔はまさに妖怪じみていた。

取引内容はツムグさんの身体を弄ぶことらしい。

「いい機会だから、藍と橙も経験しとく？」

え？

「あら？ 藍って経験済みじゃない？ 橙も混ぜるなんて、貴女、いい趣味してるわ」

「藍は経験は無いわよ？ 化かして、上手く避けていたもの。橙は、まあおまけみたいなものよ」

決定でなかったものが決定になっている？！

紫様だって経験無いはずです。

「ほら」

と、風見幽香が全裸の、いつもなら霞がかかっているモノが無く、

丸見えな状態のツムグを眼の前に提示された。

「興味津々ね」

決まりね、と言った口調であった。

●

緊急対策本部は博麗神社になった。

そこには、博麗霊夢、霧雨魔理沙と射命丸文がいた。

「あや？ 紅魔館の人達は既に動いていると？」

「お前が居なくなつて直ぐに動いたぜ？」

「人里は慧音、永遠亭周辺はてあとどんげが動いてるわ。萃香は地下に向かつたわ。早苗達も動いてるみたいよ。ナズーリンがいればよかったんだけどねえ」

霊夢は思った以上にツムグの人脈があつた事に驚いていた。

犯人であろう、幽香の居所は掴めていない。

紫辺りが知つてそうだが、連絡しようにも連絡方法がなかった。

思えば長い付き合いのはずなのだが、八雲紫宅の場所を知らない。

「ま、ツムグだつて身を守る位の事はできるわ」

「そう言つて、握り拳作っているのが可愛らしいですねー」

「アイツ、スペカ下手だからなあ。スペカ下手つて斬新だぜ？ これ、流行らそうかな。お前、スペカ下手だな。みたいに」

そこは、頷いておこう。

スペルカード作るのが下手くそで、結局、自作のは一枚しか持つて

ない。

スperlカードルールができてからのツムグの立ち位置はタンクだからなあ。

「それにしても、幽香は何を考えているのかしら？」

「あやや？ 犯人は幽香さんで決定ですか？」

「勘よ」

「勘ね。話を聞く限り間違いじゃなさそうだが。まず、私は香霖堂で霖之助を締め上げてくるぜ！」

私はどこへ向かうべきか。

魔理沙は飛んでいったが、私の勘では霖之助はハズレだろう。

「で？ 文、何か思う所があるんじゃないの？」

何故か取材後、新聞を最速で配ってまたココに帰ってきたということとは何かつかんだのだろう。

「あやー。あまり、言いたくないのですが、ツムグは食べられたのでは？」

「そんなわけじゃない！」

珍しく、大声を出してしまう。

それに対して文は驚いた様子だった。

しかし、ふうと呼吸をし、

「いや、可能性の問題ですよ。突発的に食べてしまって、まずいと思って隠れている。と私は考えてしまいましたが、それで、現場である神社をもう一度調べて新しい発見が無いかと思いはせ参じたわけでした」

と言い、現場付近を隈なく調べ始めた。

それに協力する形で、私も廊下を中心に調べることにした。

●

この位の工口なら大丈夫だと思う

視点：作者

●

第三章 幻想の協力者（後書き）

3日を2日に変更

第四章 強者の暗躍者（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第四章 強者の暗躍者

●

博麗神社に二人の少女がいる。

二人は真剣な眼差しである。

神社の廊下、部屋、境内を隈なく、何物も見逃さないという眼差しで観察している。

射命丸文と呼ばれている少女があることに気付く。

足跡だ。

地面の僅かな凹みから、誰がどの足跡か割り出した。

風見幽香のものと思われる足跡に全てマーキングを行い、足跡を辿る。

すると、境内を横切り、石階段の辺りで消えていた。

この事から風見幽香はツムグを抱きかかえ、石階段へ向かったという事実を導き出したのだ。

この時、射命丸文は内心である種の感動をしていた。

博麗霊夢の事である。

一生懸命取り組むことや努力を嫌っていたはずの博麗霊夢が一生懸命、手掛かりを探していたのだ。

ツムグの影響だろうか？

それに、幻想郷では、自分の周りさえ良ければそれで良いという考えをもつ妖怪が多かったはずである。

それが、ツムグの事を気にかけているのだ。

彼とは当初は頻繁に会いに来ていたが、取材することもなくなり、いつも通り、ネタに困った時に会いに来る程度であった。

取材に普通に答えてくれて、外の世界の事も幾つも教えて貰った。

それに、力を分け与えている能力で、一度力を供給してもらった事がある。

その事について、秘密にしていることがあった。

それは、妖力供給は性的快感に近いものがあったのだ。

妖怪によっては感じ方が違うと思うが、天狗に関してはその感覚である。

風見幽香も同じ感覚で、それを理由に誘拐してしまったのではないか？

と射命丸文は考えたがあまりにも自分本来であり、まるで、自分がそうしたかったと思えてしまい、考えるのをやめたのであった。

●

「ここから、こう歩いて、ここで終了です。あとは階段を降りたのか、飛んでいったのか分かりませんね」

廊下付近から境内を通り、まっすぐ階段に向かう足跡。

霊夢さんは考え込んでいる。

私は取り敢えず、と前置きして、

「階段の降りた先を見えますね」

「ええ、頼むわ。文」

はい、と言い。階段の最下に到着した。

「ん？ これは、風見さんの足跡ですね。それと、これは？」

金色の毛玉が幾つかある。

八雲藍の尻尾の抜け毛だ。

それも大量にあった。

まるで、何者かに筆られたような抜け具合だった。

写真を撮り、毛玉を入手。

霊夢の元へ戻る。

「やっぱり、鍵は八雲紫ね。藍の方は、偶然遭遇した幽香に脅され
たって所ね。共犯かしら？」

「いえ、それなら雫られたような毛玉は残りませんよ。それに、ス
キマで拐うでしょうし」

ホッと安心する。

少なくともツムグは生きている。

八雲紫は無理やり関わりを持たされたと言う所でしょう。

やはり風見さんの突発的な単独犯行でしたね。

偶然か、たまたま犯行後に八雲藍さんが出くわしてしまい、巻き込
まれたと言うのが流れでしょうね。

早速記事にして新聞を作らねば。

なんと、号外を出したのがお昼過ぎで、今はまだ昼と夕方の間だ。
最短記録で新聞発行ですね。

「では、私は新聞を作りにも一度帰りますね。たぶん今後の事は八雲
紫さん辺りから何かあるでしょう」

「文、ありがとうね」

飛び去る前、背中越しに感謝を述べられた。

お礼を言われた方が恥ずかしい思いをするほどの笑顔を去り際、振
り返る事で視界に入った。

ほんと、可愛いですね。

●

「さー、正直にツムグの居場所を答えな！ 今なら吹き飛ばすだけ
で許してやるぜ？」

「ちょ、ちょっと待て。俺も新聞を読むまで知らなかったし、そもそも新聞の内容は本当なのか？」

「白々しいぜ。言い訳はあの世で聞く」

香霖堂に激音が響いた。

●

「妬ましい事にアイツと風見は通ってないわ」

「あつそ、じゃ」

「ちよつと！」

「伊吹萃香はクールに去るぜ！」

パルパルパル……。

●

「迷いの森には入ってないね」

「そう、てゐ、ご苦労様。はい、人参」

「わーい」

「師匠、どうなんでしょうね？」

因幡てゐ、鈴仙・優曇華院・イナバは八意永琳のため息を聞いた。

「まあ、博麗の娘がなんとかするでしょう」

●

ツムグはある意味境地に立たされていた。

声を出そうにも猿轡さるくわで口は封じられており、更に目隠しがされてい

る。

その上で、両手を縛られていた。肘は曲がるが、肘の辺りまで何かで縛られている拘束感がある。

足は自由に動くが、今、仰向けに寝かされている状態だ。

体内時間では今は昼過ぎ位だろうか。

そもそも、昨日の夜、幽香に唇を奪われた後の記憶が曖昧だ。

夢心地で幽香と肉体関係を持った夢を見ていたと思いたい。

しかし、身体に感じる疲労感がそれが真実であったと実感させる。

では、何故、捕まっているのだらうと思う。

肉体関係を持ったことは、過ぎ去ってしまった過去だ。酔った勢い、犬に噛まれたと思う。

逆レイプだよな。夢の内容は。

今の状況はあまり良くない。

誰かと組まないと力を発揮できないのは自覚している。

それに、切り札となるスペルカードも取り上げられているみたいだ。巧妙に下着の内ポケットに忍ばせてあるのだが、たぶん幽香にアレされた時に脱がされたとなると、神社に置きっぱなしだらう。

突如、人の気配がした。

「起きたわね？」

この声は幽香だ。

動けないので頷く。

「ま、不便だから、口のは取るけど、大人しくしていないと、そうね。犯すわよ？」

それは下卑た男が弱い女の子にする脅迫だと思う。

口の拘束が解かれた。

「趣味か？」

「ふふ、そうね。趣味と言えば趣味ね。それにしても、聞かないのね？」

現状だったり、幽香の目的とかの事だろう。
下手に刺激して犯されても困る。

「まあ、なんとなくね。取り敢えず、口の次は目か手の方を解いてくれると助かるぞ？」

「却下ね、水とご飯を上げるわ。ええ、もちろん全て食べさせてあげるから」

ありがたくて涙がでるね！

拘束されているということは、逃げられたら困る状況にあるということだ。

逆レイプされた上に、拘束か。趣味だと答えたから。そういう事をするのだろうか。

霊夢の事だからそろそろ事態に気付いて動き始めているだろう。

さて、脱出は無理だ。相手が幽香で、味方がいない。

拘束具も割りとマジな逸品のようだ。

力を込めたがビクリともしない。能力では拘束力を強めるだけだし。せめて、自分自身に力を分け与えることができれば抜け出せるのだが、できないものはしょうが無い。

「つまらないわ。考え事しながら私の手作りの料理を食べるなんて……」

知るか！

と思うが、口には出さないでおく。

腹は膨れた。

「いや、説明なしに現状を推察していた。飯はうまかったよ」

突如、視界が明るくなった。

何きっかけで許されたのかと思えば、

「うっう、恥ずかしいですよ。紫様」

「藍さまああ、私もです」

「まだまだねえ」

全裸の八雲紫、八雲藍、橙がいた。
もちろん、幽香も全裸である。

「何？ 俺の全裸ネタが流行ってるの？ パクリ？」

「私達を見てその反応ができる男は貴方位ね。ま、時間はあるし、
ね？」

紫の発言に頷く残りの三人であつた。
それに対して引き攣る顔をした。

●

【号外！ 博麗神社のツムグ氏を風見幽香が誘拐？！ 真犯人は八雲紫か？！】

文々。新聞の見出しである。

前回、風見幽香氏に向かうと言った記者こと、射命丸文は早速、自宅へ向かった。

自宅には誰もおらず、ツムグ氏の安否を確認できなかった。
しかし、博麗神社に証拠ありと気付いた記者は再び博麗神社に向かう。

そこで、重大な手掛かりを掴む。八雲紫氏の式である、八雲藍氏の毛を見つけたのだ。

この動かざる物的証拠により、誘拐犯の真犯人は八雲紫氏だと博麗霊夢氏は断言した。

この事件関わる、風見幽香氏、八雲紫氏、八雲藍氏に組織的な誘拐犯の疑惑が掛けられた。

次号！ 特派員、射命丸文は事件の犯罪組織に立ち向かう？！

●
夕方の博麗神社に集まる陰がある。

紅魔館メンバー、スカーレット姉妹、メイド長、十六夜咲夜、門番、紅美鈴。

鬼の幼女。伊吹萃香。

白黒魔法使い。霧雨魔理沙。

博麗神社の主、博麗霊夢である。

●
「久しぶりに、霊夢の手料理ね。ツムグに任せきりで腕が落ちたんじゃない？」

「うるさいわよ。レミリア」

「お嬢様、仕方のないことです」

「お姉さま、普通だよ？」

「そうね。普通よ。霊夢」

「相変わらず、妹ルールだぜ……」

紅美鈴は珍しく真剣な顔をしており、その先には焼き魚があった。あれ？ 美味しいと思う私がおかしいのかな？

「私は飲めれば問題ない」

マイペースな萃香を横目に、紅美鈴はまあいいかと思った。

それにしても、珍しく主要メンバーで外出ですねー。

紅魔館の方はパチュリー様に任せきりでいいのでしょうか？

お嬢様は今夜の夕食を博麗神社ですと約束したらしく、律儀にそれを守ったのだが、招いた本人はいなかった。

私の彼に対する意見としてはセクハラ。全裸。馬鹿である。

人間であり、力も無い。

週に一度、私に武術を習う程度であり、武術の実力も褒められたものではない。

人里の男よりは若干強いだろうが。誘拐犯の風見幽香さんには到底敵わない。

しかし、お嬢様と妹様とで彼を探しに行こうとしたのには驚いた。何せ、日の出ている時間帯に文々。新聞で知って直ぐに飛び出そうとしたからだ。

そこは咲夜さんが止めて、二人の代わりに私と咲夜さんで探し回りましたが、結局、夕方前の文々。新聞である程度のがわかり、博麗神社に赴くことになったのだ。

「それで？ 霊夢、これからどうするわけ？」

お嬢様がワインを霊夢さんに傾けて問う。

「別に？ その内、紫が来るでしょ。ま、今日は下準備で、明日の昼までに何も動きがなければ八雲宅を探しだすわ」

「そう、なら取り返したらその日の夜に私の所に来なさい。もちろん、ツムグを連れてね」

「お兄ちゃん連れてきてね」

はて？

いつの間に妹様は彼をお兄ちゃんと呼ぶようになったのだろうか？

「善処するけど、後2日位掛かりそうな気がするわ」

「それは？」

どういうこと？という意味を込めて聞いたのだと思う。

「どうも、変な感じがするのよねえ」

「霊夢はそればっかだぜ。霖之助はマジで何も知らなかったみたいだし。何気に霖之助も心配してたぜ？」

「地下には何もなかった」

彼の行動範囲は広いみたいだ。

「永遠亭にもいないって文は言ってたわ。紫の家にいるんですよ」

「食べられてなければいいんですけどねー。性的な意味で」

「――」

アレ？ 私何か変なこと言いました？

「お姉さま、美鈴の言ってる意味ってなに？」

「フランにはまだ早いわ」

「そうです、妹様。美鈴は、ちょっと頭が可哀想な娘なのです」

あれれ？

おっかしーな！。

妖怪が男を囲うってそういう意味もあるんじゃないやありませんでしたっけ？

まー、私はそういう事したこと有りませんからわかりませんけどね。

●

作者は風見幽香と本みりん×

紅美鈴が結構好きである。

配置：（本心）

●

第四章 強者の暗躍者（後書き）

レミリアのセリフ修正

3日を2日に変更

第五章 幻想の挾撃者（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第五章 幻想の挾撃者

●

5 人の人影がある。

女が 4 人でそれぞれが美人、美女である。

4 人の内 3 人は持つものである。

1 人の持たざる者は羨ましくもあり、何故自分だけ薄いのだろうか考えた。

しかし、繰り広げられる行為を前に自分が女である事を自覚することになる。

薄くても感じられる。

さらに言えば自身がここまで、乱れるとは考えもしなかったのだ。

自ら、啞えたり、腰を振った。また、主人である、女性に愛撫され、愛撫し、より、乱れた。

男のほうは衰えを知らず、ひたすら 4 人を相手に貪り尽くす。

誰が何回、果てたか分からず、ひたすら求め合い、時間を忘れた。

●

八雲紫は考察した。

何故、風見幽香の提案を飲んだのか。

また、何故彼を求めたのか。

風見幽香から漂う、濃厚な行為があったと知覚できるほどのオスの匂い。そして、以前見た自分の記憶にある風見幽香と比べると、より、美しく、より力強くなっていたように感じた。

妖怪で女である自身がより美しく、強くなりたいという欲求と、そういう行爲に興味があったことが彼を求めた理由なのかもしれない。

男と交わるのは初めてであったが、思っていた以上に、よかった。特に、後ろから突かれるのが癖になりそうだと。それにしても、幽香のアレは見ていても興奮した。跨り、腰を振り、相手は男なのに、乳を責めたり、唇を蹂躪していた。

その上、相手が果てようとするタイミングで必ず、行為を止めてお強請り《おねだり》させるのだ。アレが、”いぢめプレイ”というもののだろう。

一度、風呂に入り身体を清める。服を着て、霊夢にどうやって試練を与えるか考える。理由は沢山ある。

ツムグがいないと自堕落になるし、神事もやらないだろう。腕は立つが、ツムグなしでの戦闘は最近していないと思う。ならば、ツムグのいない状態で現在の実力の確認、強敵との対戦で己を自覚してもらおう。

そう決めた。

順序は、藍と橙の相手、幽香の相手という所か、霊夢に味方がいる場合、私も動き、分断させよう。

萃香辺りは、全部見通しているかもね。

あの子、猫かぶりだしね。

萃香の事を考え終わろうとした瞬間にそれは発生した。

「あのよー、なびる 蹴るのはいいけど、使い物にならなくなしたり、殺したら、お前、殺すよ？」

「ふふ、萃香、一体いつから知ってたの？」

姿はどこにもないが、確かに声は聞こえる。

密と疎を操る程度の能力で霧と化してしるのだろう。

「んー？ 幽香がツムグに襲った辺りから。二人には私の一部を紛れ込ませてね。なかなか面白いことになってるじゃないか。霊夢には聞かれてないから黙ってるけど。私の能力の事、頭から抜けてるね。もう一度言うけど、旨い摘みを作るやつを殺すんじゃないよ？ その時は解ってるな？」

「はいはい、ま、後2日もしたら元に戻るんじゃないかしら？」

そうかー。と聞こえたのを最後に声がしなくなった。

さて、後、2日持たせるには今日の昼には霊夢の所に行かないと、たぶん乗り込んでくるわね。

まだまだ、考えることがある。

遅めの朝食を食べて考えるとしよう。

●

博麗神社に2匹の妖怪がいる。

射命丸文と伊吹萃香だ。

射命丸文は天狗であり、伊吹萃香は鬼である。

鬼と天狗の関係性は鬼が上位存在で、天狗は鬼には逆らえない。

しかし、射命丸文と伊吹萃香の仲は例外と言える。

「狡猾な天狗、どこまで搦んでる？」

「まあ、ツムグさんに八雲紫さんが手を出せない程度には。もちろん生命的な意味で。性的な意味で、どうか？ と聞かれれば確実に手を出しているでしょうね。大妖怪が3人。橙も含まれますかねー？ ま、橙もあれでも妖怪ですからね」

「そこまで搦んでるならいいよ。霊夢には……」

「内密ということですね？ 風見幽香さんの口車に八雲紫さんが乗

ったという解釈で正解ですか？」

射命丸文の質問に伊吹萃香が頷く。

「紫は後2日でこの騒動は終わると見てるし、霊夢も同じような事を言ってたからそれまでは大人しくしてな。その後は、わかるよなあ？　なあ？　エロ天狗？」

「ははは、なんのことですかね？　エロ鬼」

二人の口元は弓のように曲がっており、獲物を定めた妖怪の顔であった。

●

博麗霊夢は自身の感情に戸惑いを覚えていた。

今回の事件は八雲紫がサボリ気味な自分に活を入れるためのものだと思う。

しかし、己の内に嵐のような渦を巻いた感情がある。

いつも隣にいる筈の人物がいない。

ただそれだけの事であるが、齒の間に異物が詰まっているような不快感とその不快感を感じる自分がまるで彼に特別な感情を抱いていると思えてしまい、それを否定する自分と肯定する自分に別れ、どちらも自身の感情である。

つまりは、好きか嫌いか。恋人か友人か。愛情か友情か。家族か恋人か。

どれに分類できるのか自分でも分らないまま感情だけが渦巻いていた。

友人と思っていた異性を意識してしまい、顔を合わせたら赤面するであろう思春期の女の子。

たぶんこれが今の博麗霊夢に合う言葉である。

●
博麗靈夢が全ての準備を終え、さて、これから殴りこみに行くかというタイミングで、空間にスキマ現れた。

「はぁーい靈夢」

「あら？　今から殴りこみに行こうとしたのに。残念ね」

胡散臭い八雲紫をともに相手にする必要はないので、要件を聞くことにした。

「今回の騒動、私への試練？」

「はい、正解。基本ルールはスペカルルールだから。ま、頑張つてね。そうね。最終目的地は風見幽香の自宅よ。そこに辿りつけば、商品があるわ」

つまり、幽香の家にツムグはいるわけね。

それまでの道のりにおそらく敵が待ち構えている。

「1人で行くのが好ましいわ。邪魔者には邪魔者を。ね？」

「わかったわ。ま、私が誘わなくても勝手についてくるんだから私の知ったこっちゃないわ」

もともと、居場所さえ分かれば1人で向かうつもりだった。

1人で向かい……。どうするつもりだったのだろうか？

ツムグに怒る？

何故？

そもそも居候であり、出ていく時は出ていく存在だ。

勝手に出ていくなと怒るのか、それとも心配させるなど言うのか。

ご飯を作るのは誰がやるのよ？　とでも言うのか？

今回は八雲紫と風見幽香がわざとらしく仕組んだものだが、本当に何者かが、ツムグを誘拐したり、食べたりしたら私はどうするのだろうか。

●

勘の良い子だから、気付いたはずだ。

ま、何を思うかは霊夢の勝手だが、こちらの意図は気付いてくれたはずである。

本来持つ、実力以上のモノが出ればいいのだが。

霊夢の成長は、娘の成長を見るようだなぁと思う。

今回の事件は風見幽香がきっかけだが、それに乗じてよかった。

釣り上げる為の餌が良かったよね。

眉が釣り上がり、口が三日月に歪む。

「人の子よ。何を求め、何を想い戦うのか、しかと確かめよ。そして、全ての結末を受け入れなさい」

●

霧雨魔理沙は相対する。

人間として、空を飛ぶスピードは最速クラスだが、妖怪を含めると最速は射命丸文になる。

その射命丸文が目の前にいる。

博麗霊夢の後を追うために、八雲紫の謎の発言を盗み聞きしていた。空を飛び、追いつく前に割って入って来たのが、

「文あ。邪魔するのか？」

「えーと、そうなります」

彼女であり、どうやら霊夢との合流を妨害しに来たようだ。しかも、あまりノリ気ではないと言う口調だった。

「私の役割の9割は今の時点で終わってます。恨まないでくださいね？」

「ハッ！ どうゆうことか説明がいるぜ。おい！」

スperlカード無しで、射命丸文の風を操る程度の能力で操られた鋭い風が、服を裂いた。

「大丈夫ですか？ 加減はしますんで、後止めとかはスperlカード使うので安心して下さいね」

「どうゆうことだって、あぶねえぜ」

蹴り？！

寸前で回避した。

いつもの戦いとは随分と違う戦闘法だぜ。

ミニ八卦炉を取り出した瞬間。

文の姿が消え、

「一瞬、視線を外したのが不味かったですね」

右足を掴まれ、そのまま、真下に加速された。

高速の移動で、空気抵抗、風切り音。これが、最速の世界かあ。

一息つく間に空中で地面に向けて真下に放り投げられた。

「おわわあ ああ」

風の中、見た。
地上で傘を真上の、こちらに向けている人物。
風見幽香だ。

『元祖マスタースパーク』

極太の光に包まれて、思う。
こっちが本命だ。
文はここに運ぶ役割かよ。
卑怯だぜ……。

●

「面倒臭い相手ね……」
「おや？ もう弱音ですか？」
「私達にたてつこうなんて——」

ピチューン。

「なにするんですか？！」
「それはこっちのセリフよ」

橙を落としても、八雲藍がいる限り復活し続ける。
なるほどね。私とツムグの關係に似ていると思う。
それにしても、この状況はなんだ？
橙を落としたがいいが、まだ20匹ほどくるくと飛び回っている。
おそらく能力か、八雲藍の技だろう。
式を増やしたのではなく、幻影だ。
そうになると、本体を叩くか、八雲藍を叩くかしないと数は減らない
のだろう。

全く面倒ね。

ツムグがいたら、霊力込めた弾幕を360度面を張るように撃ちまくるのに。

霊力消費量と、スペルカード枚数を気にする。

スペルカードルールによる、提示された使用回数は3回。修行不足ね。

『霊符：夢想封印』

複数の光弾が相手を覆い、追撃する。

落ちるのは橙ばかりだ。

だが、本体を落とせた。

八雲藍にも攻撃は迫った。

「残念、ハズレです」

スルリと抜けるように避けられた。

弾幕は弾幕同士でぶつかり、消滅してしまった。

追撃性が高いのが裏目にでたか。

目障りな橙が落とせたから良しとしよう。

●

紅魔館上空。

館は小さく見える。

十六夜咲夜は、主であるレミリア・スカーレットに命を受けた。

ツムグを博麗霊夢より先に奪還せよ。

しかし、と付け加えられた条件は、出来る限り身の安全を優先にすること。別に失敗しても良いこと。

なんとも妙なモノを感じつつも主の命を受け、十六夜咲夜は動いた

のだ。

「こんなところで時間を潰してる暇はないんだけど……」

「ういゝ、ここは通さないよぉ」と

酔っぱらいに絡まれている。

見た目はお嬢様と同じく幼いが、同じく妖怪である。

そして、

「私は鬼、あんたは人間。ってねえ。スカスカのナイフでまた戦うかい？」

挑発してくる。

「私の代わりにナイフを回収しますか？ 貴方なら簡単でしょう？」

挑発で返す。が、瓢箪ひょうたんを呷あおり、ゴクゴクと酒を飲んだのだ。

「??」

「摘みは？」

上目遣いで聞いてきた。

「――」

●

紅美鈴は珍しい事もあるものだと思っていた。

十六夜咲夜が飛び出して、あつと言う間に舞い戻ってきたのだ。しかも、伊吹萃香を抱っこした状態で。

「任務失敗……。病気が発病ですね。可愛い物に目がないのか、幼女に目がないのか」

●

レミリア・スカーレットは考えた。

鼻血を拭き終わった十六夜咲夜のことだ。

行つてらっしゃいから間もなく、お帰りなさいだった。

しかも、対戦相手であろう、伊吹萃香を連れてきて、私とフランと萃香をテーブルに着かせ、咲夜は酒や、紅茶、お菓子に、摘みを運び、愛でる状態であった。

「なー、なー。これ、おかわり」

クイクイツと咲夜の袖を引っ張りおねだりする萃香に、咲夜は微笑と鼻血を顔に作り、悠々とメイドをやっていた。

「ダメね、この娘。早く何とかしないと……」

●

カードに込められるものは何か

配点：（紅白）

●

第五章 幻想の挾撃者（後書き）

登場させて欲しいキャラがいる方は感想などに書いてくださいます。
参考にします。

なお、必ずリクエストされたキャラが登場するとは限りませんので
ご了承ください。

第六章 相対の覚悟者（前書き）

の小説は東方Projectの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第六章 相対の覚悟者

●

博麗霊夢と八雲藍は弾幕で弾幕を潰し合っていた。それぞれ残りの使用できるスペルカードは1枚。どちらとも切り札である。

弾幕と妖術で技のレパートリーが多い八雲藍。勘と力押し、といった博麗霊夢。

だが、勝利したのは博麗霊夢であった。

スペルカード「夢想天生」を使用し、ありとあらゆるものから宙に浮く無敵状態で、八雲藍を殴り落としたのだ。

「まさか、体術とは……」

「しょうがないわ、残り霊力があまりないもの」

防御結界の維持や、弾幕で消費が思った以上に多かったわね。

藍の戦い方がこちらを消費させる消耗戦の戦い方だった。

「で？ 幽香が次の相手？」

「余裕があるのも今のうちね」

私の真下から空に傘を突き上げて高速で突き刺そうとしてきたのだ。もつとも、当てる気がない、挨拶程度の攻撃であった。

幽香は嗤い、右手の親指を首を切るように動かし、そのまま親指を地面に向けて、挑発してきた。

「地上で殺りましょう？」
「ナメんじゃないわよ！」

●
八雲藍は思う。損な役割だ。と。

式神である橙を回復させながら、風見幽香と博麗霊夢の戦いを観ていた。

今頃、紫様は何をしているのでしょうか？

ゲストを何人が招いて邪魔者を排除すると張り切っていたが上手く行っているのだろうか？

状況を確認するために橙とは別の式神を飛ばす。

まだ、1日半はあるが、大丈夫だろうか？

●
「ここに来て、必ずここに到達してくるのは貴女だと思ったわ。」
動かない大図書館』の二つ名とは対照的な動きね」

「八雲紫？！」

八雲紫は風見幽香宅でツムグを監視していた。

ツムグは現在、幽香のベッドで眠っている。

幽香がいないが、自分の家のようにいると、漁ってみた。

何枚かパンツを頂き、紅茶と洋菓子を取り出してのんびりしていた所に、突如、扉が開いたのだ。

絶句している魔法使いのパチュリー・ノーレッジに言葉を掛けたのだが、私の名を叫んで驚いた。

「ち、ちゃんと準備してきてあるんだから！」

負けないわよ、と。言いたいのだろう。
しかし、

「まあまあ、紅茶、飲む？」

「飲まないわ」

こちらの手には乗らない。

「あら残念」

「どうゆつつもり？」

紅茶を口に含み、飲む。うん、我ながらいい出来だ。

「霊夢ったら、彼がいないと駄目娘だから」

それに、と付け加え。

「多くの者が彼に依存しても困るしね。貴女のように」
「なっ」

顔が薄紅に染まる所が可愛らしいと思う。

「彼、眠らせてるけど。犯す？ それとも、自分だけのモノにしちやう？ 普通に起きないようにしてあるわよ？」

「ば、バカ言わないで！ 全く、何考えてるの？！」

と言いつつ、彼の姿を視線に捉えて、意識しているので、彼女もまた、処女なのだろう。

「私達”は頂いちゃったけど？」

貴女もどう？ 興味あるんでしょう？ と意味を含めて問うた。

「――」

顔が薄紅から、深紅に染まる。

葛藤しているのか、遠慮しているのか。

だが、もう一押しだろう。

「霊夢のためよ？ それに誰にも言わないわよ？ ほら、本だけの知識じゃなくて、実体験も必要じゃなくて？」

「――」

パチュリー・ノーレッジは熱に魔まされたような足取りで彼のベッドに近づく。それに伴い私がリードして彼に掛かっている布団を剥がし、彼の全身を頭あたまにし、先日得た知識を彼女に伝えることにした。

●

風見幽香宅で二人の少女が忙せわし無く動いていた。

1人は魔法使いで、1人は妖怪であった。

魔法使いは妖怪の手本に興奮して、自らを慰めながら彼のモノを二人の口で言ばせた。

十分に準備が整った自分に恥を覚えながらも、彼に跨り、自分のペイスで彼と繋がった。

妖怪は魔法使いの豊富な双山と、自分が一番感じる所を同時に攻めて、彼女を淫らにした。

眠っている彼を相手にするには自らが動く必要があり、二回魔法使いが果て、疲れを訴え、行為は終了した。

妖怪は伝えた。

体力をつければもっと楽しめる。

魔法使いは本気で体力をつけようと決心したのであった。

●

地面は所々で決れ、穿たれていた。

傘での薙ぎ払い、突きの後である。

踏み込みで、地面が陥没し、移動で土煙が舞う。

穿たれる傘を闘牛土の様にヒラリと交わり、身を屈め、相手の勢いと、力をそのまま使用し、投げる。

風見幽香の剛に対し、博麗霊夢は柔である。

投げられた風見幽香は片手で地面を弾いて、はんとん翻転し、地面に立つ。

「なかなかやるじゃない」

風見幽香は内心でほんの少し感心した。

センスの塊ね。

紫が試練を与えたがるわけだ。

鍛えればすぐに伸びるでしょうね。
来る。

こちらの攻撃を起点に反撃だったのが、あちらからも攻撃してくるようになった。

拳を痛めない掌底がこちらに向かって飛んできた。

女相手に顔面狙いとは容赦無いわ。

軽く頭を右に振って避ける。

「私程度の打撃を避ける。失敗ね」

掌底を放った腕が顔面横をすり抜け、腕が首に回された。

「首投げ。決まり！」

体が回転し、背中から地面に落とされた。
柔術か。

「この程度、効かないわ」

「自分の胸を見てみなさい」

言われて胸を見た。

背筋に冷たいものが走る。

胸には符が貼られて、おまけにスペルカードも付いていた。

「遠隔、ゼロ距離『夢想封印』！」

●

決まったわね。

光と爆煙に包まれた先。幽香の立っていた所に視線を向ける。

符を介した、スペルカードの遠距離発動。

私だって、何もしていないわけではない。

実践で使用するのは初めてであったが、日常生活で遠距離発動の符はよく使う。

朝、寝転がったまま着替えを転送したり、冬に動きたくない時に色々な物を手元に転送したり、無駄に便利な技術を思いつくなあとツムグに小言を言われたが、これも修行と言い訳をしておいた。

スペルカードにも使えると知ったのは先日モノは試しにと思って実験した時だが。

突如、土壁が目の前に生えるように現れた。

「これは、パチュリーの?！」

気を取られ、土壁の向こう側、妖力が急激に膨らんだのに反応が
くれ、

最大出力：『元祖マスタースパーク』

全てを穿ち向かってくる巨砲の光に包まれていった。

●

風見幽香の胸元は露^{あら}わになり、下着と、谷が見えていた。
所々、焦げ、破れ、土埃で汚れていた。

目の前には地平の先まで地面が穿たれた後があり、

「あの距離、あのタイミングで防御が間に合ったみたいね」

博麗霊夢の姿があった。

「お陰様で、余計な霊符とスペカを使ったわ。それに服も汚れたわ
ね。それはお互い様みたいけど」

パタパタと服の汚れを払い霊夢は言葉を放ってきた。

「まだ続ける? まあ、私の勝ちだけど」

「なんですって?!」

そこに八雲藍が割り込んで、

「えーと、説明すると、スペルカードルールの決闘開始前のカード

提示もなければ、不意打ちによる攻撃の反則、それに、超々小声で霊夢さんはスペル使用回数を自分は2回、風見幽香は1回と宣言してます。幽香さんはスペルカードの『マスタースパーク』を攻略されたことで負けです」

それに、と霊夢が付け加えるように。

「スペルカード対決は一对一の決闘よ？ それに横槍を入れたパチユリーがいるから私の勝利か、よくて無効勝負ね。ま、もう一戦してもいいけど。どうするの？ やる？ やらない？」
「やめとくわ」

これ以上続けたら目的を忘れてしまいそうだから。

眠り姫を起こすのは誰か

配点：（主人公）

第六章 相対の覚悟者（後書き）

登場させて欲しいキャラがいる方は感想などに書いてください。
参考にします。

なお、必ずリクエストされたキャラが登場するとは限りませんので
ご了承ください。

第七章 夢見の眠り姫の追想（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第七章 夢見の眠り姫の追想

●

博麗霊夢は自分の勘に信頼を置いている。

風見幽香が割りと素直に敗北を認めた時点で、この先、何かあると勘が告げていた。

「珍しいわね。パチュリー？」

外出はあまりしないはずのパチュリーが外にいた。

その上、こちらの敵対する行動を取り、現在は、唸っている。

「今度の件に私も絡むから」

ちょっとした詐欺に引っかかたような物言いだったが、紫が何かしたのだろう。

それにしても、体力、霊力量ともに心許ない位に消費している。

それでも、負ける気などしない。

何故なら、怒っているからだ。

自分自身で怒っていると自覚しているが、表に出さないようにしている。

「臭いわね」

「え？」

男臭い、女臭い。男女の行為後の臭いがする。

パチュリーから臭う。確実に相手は彼だろう。

嫉妬ね。初めての経験だわ。

「さあ勝負よ！」

●

夢を見ていた。

幻想郷を旅と称して周っていた時の光景が見える。

●

「あたいつたら最強ね」

チルノだ。

氷の妖精である彼女を見たのは旅を始めてすぐの事だった。

誰彼関係なく、勝負を挑むチルノに見つかり、スペルカード勝負の末、負けた。

今思えば、この出会いが全ての始まりであつた気がする。

「師匠ー！」

「このバカ弟子があ！」

チルノが師匠で、俺がバカ弟子であつた。

勝負の後に俺を鍛えるという名目で俺の旅の同行者となつたチルノだが、俺の【力を分け与える程度の能力】の有効性に気が付き自称幻想郷最強から他称幻想郷最強へとシフトしようと思惑があつた。

そして、俺が怒られる理由は、妖怪に追われて、チルノに助けを求めたからである。

名も無き妖怪は氷漬けの標本となつたのだ。

「うーん。やっぱり、バカ弟子と一緒にだとあたいの最強がもっと最

強ね」

「師匠は何を言っているんだ？ それより、次の目的地はあそこの山ですよ」

山の麓に入り数歩の所で、

「毎度お馴染み、射命丸です。人間と妖精の珍しい組み合わせですが、人間の立ち入りは危険ですよ？ まあ食べられてもいいというなら構いませんが」

どこからとも無く現れた射命丸文との邂逅だった。

「なんと！ 私が負けるとは！？」

「あたいつたら最強ね！」

高速移動の射命丸文に対し、チルノは全方位弾幕で対応し、避け切れなかった射命丸文が負けたのだ。

どちらかと言うと、わざとギブアップした感じであつたが、チルノは気付かなかった。

「なるほど、貴方の能力で、チルノがあんなに戦えるんですね」

チルノの強さに疑問を抱いた射命丸文の質問に俺が答えのだ。

「ワザと負けて、こちらの手を読んだのか？ と射命丸文に疑惑を持ったが、唯のパパラッチだった。

「わざわざ、歩いて幻想郷を周っているんですか！？ 変わった人間ですね。それに、何故、全裸？」

意味もなくよく全裸になっていた。

決して暑かったから脱いだとかじゃない。
趣味だ。

「ツムグってバカなのか？」

バカにバカと言われて凹んだ。

師弟関係の為、強く文句が言えなかった。

その後、射命丸文と別れ、大ガマに飲まれた俺をチルノが助け、それが、記事になったのだ。

大ガマは本当はチルノを懲らしめようとしたのだが、誤って俺を飲んでしまったと謝罪された。

見た目はカエルだが、良い奴だった。

チルノにカエルを凍らせて遊ぶのは良くないと説明して納得してもらった。

●

川辺で河城にとりと激突した。
相撲である。

「ぐぬぬ」

「久しぶりの盟友との相撲だね」

河城にとりは突っ立っている状態で、俺は全力で胴にタックルしている状態である。

良い匂いだなあ、と思うが、ビクともしない。

自称、人見知りの技術者でカップを見つけたのは偶然である。

光学迷彩スーツでこちらの様子を見ていた河城にとりに俺が、

「カップいんのかな？」

と言った矢先に、

「げげ、何故見つかった？」

呼んでもいないのに現れた。

カップと言えば相撲、きゅうり、頭の皿であった。

そこで、相撲勝負が何故か始まった。

そして、

「嘘みたいだろ？ 俺、負けてるんだぜ……」

普通に負けた。きゅうりの栽培を強制された。

しかし、成長力など与えて、インスタントきゅうりの速さで成長、収穫、きゅうり祭りだった。

「うまいっ！ 力が、力がみなぎってくるよ！ 盟友！」

きゅうりが好評で、しばらく、にとりとチルノと俺は河城にとり工房に世話になった。

世話になったと言うよりは、うまいきゅうりの為に押し留められたと言う方が正しい。

しかし、カップの技術力は世界一イイイイ！

「光学迷彩に、自動小銃か、戦争屋？」

「外来人つてのは物知りだな。初見でこの技術力を理解できる盟友は少ないというのに。なあ、技術力すら、供給できる君を……。いや、旅の途中か、暇ができれば、またここに来るといい、カップは君を受け入れるよ」

ついでに、

「その時はきゅうりを頼む。ま、きゅうり栽培施設の完成で、年中新鮮なきゅうりが取れるようになったが、君の作るきゅうりが一番うまい」

最新農業を遥かに超えた技術力で河城にとりは俺の発案の年中きゅうり栽培施設を完成してしまった。

かつぱを総動員して、二週間。

兵器開発はお値段異常にとり。

●

チルノはこの間、何故か、バスターソードを手に入れ、振り回していた。

分解、結合出来る剣で、分解するとアイスの、スイカバーのような剣と、これまた、アイスの当たりと書かれたアイス棒を剣にしたような形状であった。

さらに、2本のチョコエッジ、2本のウエハースブレイドの、4種6本からなる剣で構成されている巨大な剣、バスターソードを俺に見せつけてきた。

仕込みが多い剣だ。

まさか、アドベントチルノとは。面白そうなのでそのままにしておこう。

武力、知力、霊力、成長力を与えるとチルノは最強氷精剣士、アドベントチルノ、つまりAチルノに姿が変わる。

身長、髪が伸び、美少女に恥じない見た目に、胸も僅かな膨らみを持つ。

それを見た、河城にとりは、

「うーん、剣にスペルカードを仕込もうか。スペルカードルールに合うように改造だよ！」

「ええ、頼むわ。にとり」

ノリノリでカツパ印のバスターソードを完成させた。

「今、この時より、あたい、改、私はAチルノと呼びなさい。バカ弟子」

「はい、Aチルノ師匠」

本人もノリノリであつた。

●

【号外！ 妖怪の山に最強剣士現る?!】

文々。新聞の見出しである。

記者こと、特派員、射命丸文は妖怪の山での異変を追った。

近頃、妖怪の山で妖怪退治をする剣士がいるという噂の真相を確かめるべく、特派員である射命丸文は上司の命令で、渋々巡回しているところであつた。そこに現れたのが、噂の剣士であつた。

その正体は氷の妖精、チルノ氏であつた。

以前の彼女をしる私は驚愕した。

彼女の容姿は、変わっていた。 写真を参考にして欲しい。

以前のチルノ氏。

現在のチルノ氏。

見ての通り、以前の幼い氷妖精が、現在は美少女の氷妖精に成長していたのである。

現在のチルノ氏は以前とは違い、巨大な剣を所持しており、発言か

ら知性を感じた。

『あら？ 取材かしら？ 私、悪い妖怪退治で忙しいから後にしてくれる？』

『そう言いながら、こちらに剣を向けないでください。取材です。取材』

巨大な剣を向けられた時、命がけの取材になると私は直感した。

『どうしてそんな姿に？』

『必要だったからよ。私は正義の味方だもの』

『正義の味方ですか、その、これからの目的は？』

『荒事を解決する何でも屋だから、依頼があれば引き受けるわ』

現在のチルノ氏はこのように語った。

『Aチルノをよろしく』

巨大な剣を軽々と抱え私の元を飛び立っていった。

次号！ 特派員、射命丸文はAチルノ氏を追う！ をお楽しみに。

●
視点は原点に帰り、原点は現在に至る。
配点：（夢）

第八章 氷妖精と神々の信仰（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第八章 氷妖精と神々の信仰

●

「私は最強よ。負けたことに恥じることはないわ」
「うそ、私が、負けるなんて、ううう〜」

Aチルノに敗北して、遁走するのは犬走椋であつた。
可哀想に。今のAチルノは俺の供給があるので、無敵状態に近い。
Aチルノ状態を保つには力を分け与え続けなくてはならない。
しかも、

「私が負けるまではこのままにいるわ。いいわね？ バカ弟子」
「了解です。師匠」

負けるまでは元に戻るつもりがないらしい。

俺にとっては、身を守る為の盾と剣であるチルノが強くなってくれたので助かる。

Aチルノと相対する際、踊っていたり、全裸になって見たり、クルクル回ってみたりと、相手の注意を引いて、隙を作っていた。

犬走椋は全裸の辺りでAチルノにやられた。

うん、なんかごめん。

既に姿が見えない犬走椋に謝罪。

「妖怪の山にやたら強い奴がいるって聞いて、期待して来てみれば、ツムグだったか」

「ん？ 萃香か。Aチルノ師匠。鬼ですよ。鬼」

俺と伊吹萃香ではアリと象。それほど実力の開きがある。

よって、Aチルノに全てを押し付ける事にする。

「氷の妖精が、随分と物騒なモノ持っているなあ。ツムグの供給つきとは、めんどくさいなあ。よし、酒とつまみで見逃すよ」

「バカ弟子、鬼と知り合いとは聞いてないよ？」

聞かれてないもの。

押し付ける相手が敵になったと？！

結局、Aチルノに叱られ、萃香の酒と摘みを強制的に用意させられた。

河城にとり工房から頂いたものが残っていてよかったと心底思う。

「それでなあ。私の事を直ぐに鬼だって、言ってくれてなあ。俺はこの娘の言うことを全面的に信頼する。とか格好つけて、なかなか面白かったなあ」

俺と萃香の出会いなどを酒の肴に語る萃香。
それを興味深く聞いているAチルノ。

「バカ弟子は、色々知り合いが多いのだな」

「妖精を師匠に持つ人間かあ。最下位生物だなあ。はは、笑わせるなあ。そうそう、この山に神が住んでるぞ。力試してなら、やってみるか？ 神殺し？」

酔っ払いの戯言が翌日、現実となる。

●

守矢神社には神様がいる。
それも2人もだ。

その神様2人は、異変に気づいていた。

「諏訪子。気付いてる？」

「うん、神奈子。ちょっとこれは、お仕置が必要だね」

八坂神奈子と洩矢諏訪子である。

2人は妖怪の山での動きを知覚していた。

八坂神奈子は、思う。

お仕置きとは、仲間の敵討ち的な意味でかしら？

カエルが氷漬けにされて、怒っていたのは記憶に新しい。

随伴する人間の評価はカエルを助けたことで好意的だ。

それでいいのか？ 神様の考えて。

しかし、これ以上、信仰を減らされても困る。

「同胞たちの報復を兼ねて、私が迎え撃つ。久々の敵よ、敵」

グツと両の手で拳を握る姿が愛らしい。

「見るからにダメそうだ」

「何か言った？」

「いいや、あの人間に気を付けなってね」

”視て”いたが、変な踊りと全裸で隙を作る役のようだが、能力持ちだと当たりを付けている。

「あんな踊り、神に通じるわけないよ。せめて舞ならわかるけど。アレは、ないよ。何かの能力持ちで、あの氷の妖精に使われてるんじゃない？」

確かに、身の回りの世話をしているのはあの人間だ。

「神に背くかあ。いいね。骨のある相手だといいいけど。そう言えば早苗は？」

「信仰集め。布教で人里」

●

「早苗さーん」

「きゃー、早苗さんよー」

「布教路上ライブ始まるよー！」

わー、と人集りができ、音に合わせて踊る、歌う。

「こーのおー空にいー」

人里は今日も平和です。

●

「はっはは、こりや面白い。祟り神と知るか。私の名も知っているとはどこぞの巫女とは大違い」

「っ！ バカ弟子！」

金属音が響く。Aチルノのバスターソードが洩矢諏訪子の鉄の輪を弾いた音だ。

パツと見、金髪ロリ少女が境内にいた。

それを洩矢諏訪子を知っていた俺が話しかけ、守矢神社の事に関して盛り上がって来た所で何故か攻撃された。

「さあ、神遊びしましょ？」

数回の攻防があり、

「うん。わかった。そんじょそこらの妖怪じゃ相手にならないわけだ。そっちの人間。全裸はいいけど、この氷の妖精の世話役じゃなくて、力を分け与えているんだね？ 崇ってやろつかしら？」

俺の能力がばれたのだ。

流石、神様。

あと、崇りは勘弁な。

諏訪子は一度しゃがみ、カエル座り状態になり、姿を消した。

「速い！」

地面が削れる程の加速と、姿が消える程の高速移動であった。

「狙いをバカ弟子にするとは、それでも神様か？」

「なあに、崇り神だからね。何を言われようと気にしないさ」

「ケロちゃん」

「あーうー、ケロちゃんって言うなあ！」

あら、何この可愛い生物。

冗談は置いて、俺がやられるとAチルノ化が解けてしまう。

汚いぞ崇り神。いや、弱点を見抜き正確に攻めてくるから正解か。それにしても、ケロちゃんって呼び方、定着してるのね。

防戦だ。

Aチルノは俺を狙う諏訪子を防ぎ、諏訪子はそれを見越して攻撃する。

互いに譲ることなく、弾幕を撃つ、斬撃を放つ、何故か、殴りあう。
ここまでの長期戦は初めてだ。

改めて、神様と戦っているんだ、と自覚した。

供給ありで、決着がつかない相手は今までで初めてだ。

一瞬のことだ。

諏訪子と、Aチルノが取っ組み合いになったその瞬間に、二人もろとも、巨大な御柱に潰された。

「師匠ー！」

飛び出して助けようと思った矢先、身体が浮いた。

「神相手によくやったと思うよ？」

「は、離すな！ 当たってんのよ！」

「……へえ、面白いわね。幻想郷には変わった人間も居るのね」

八坂神奈子だ。

当たっているのは持つものの柔らかさである。

後ろから両脇に腕を通され抱きかかえられている。

抵抗したが、力負けしている。ビクともしない。

むしろ、背中に感じる柔らかい物がポヨンポヨンで良い感じである。

御柱が音もなく持ち上げられ、空の彼方へ放り投げ捨てられた。

「もー、何すんのお？」

諏訪子である。

「仲間ごと潰すとは思わなかったわ」

Aチルノである。

土まみれであるが、二人共無事であった。

両者は、視線を合わせ、

「私たちの勝利」

「私たちの敗北」

諏訪子が勝利宣言し、Aチルノが敗北宣言をした。

Aチルノは

「バカ弟子が！」

「俺に戦闘は無理だよ」

チルノに戻る。

「あー、楽しかった。じゃあね。そろそろ、大ちゃんが心配するから帰るね」

別れの挨拶も無しに飛んで帰ってしまった。

「おーい、俺を置き去りかよー！」

「さ、君はこっちに、やっぱ勝負のあとは宴会だよ」

神奈子に捕らえられた俺を見ながら諏訪子は言った。
そして、神社の方へ運ばれることになり、

「酒も、食事もある。ゆっくりしていくといい」

神奈子が耳元でそういった。

●

【号外！ また守矢か？！ 信仰と布教の代行者に男の陰？！】

文々。新聞の見出しである。

Aチルノ氏を追っていた記者こと、特派員、射命丸文は見た。
なんと、守矢神社の神に挑んだAチルノ氏。

しかし、激闘の末、Aチルノ氏は敗北し、逃走した。
何故かその場に取り残された一人の男性が守矢神社の神々に囚われたのだ。

その数日後、皆さんもご存知であるだろう。

守矢神社に参拝者が激増したのだ。

東風谷早苗氏の路上ライブが、神社を使った壮大な、コンサート会場になったのは、囚われた男性の発案であると特派員は推測する。

その証拠が、ある。 写真をどうぞ

人里で東風谷早苗氏と宣伝する男性の姿。

神社で男性とコンサート会場を設計する八坂神奈子氏と洩矢諏訪子氏。

守矢神社に日々集まる信仰、今後の守矢神社に特派員、射命丸文は密着する

次号！ 守矢神社の真相。暗躍する男性は何物か？ をお楽しみに。

●

信仰と進行。

進む道に集まるものは何か

配置：（布教）

•

第八章 氷妖精と神々の信仰（後書き）

初の予約投稿

いつのまにやらお気に入り登録が増えていた。

嬉しい限りです。頑張ります。

しばらくエロ成分は発生しません。

第九章 閉鎖内の権力者（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第九章 閉鎖内の権力者

●

神社コンサートは盛況に終わる。

境内で売られるものは、絵馬、酒、食事、コンサート通行証、東風谷早苗関連グッズなどである。

コンサート通行証にはスタンプ欄があり、一定のスタンプを集めると、東風谷早苗と握手できたり、直筆の手紙が貰えたりできる。

神社コンサートの参加は、無料である。

しかし、コンサート開始時間のご飯時である。

開始までに会場である神社で食事を済ませ、酒や飲み物を片手に、コンサートを見るのがツウの楽しみ方であり、信仰者は、コンサート通行証を首から下げ、腕に守矢神社信仰者の証である守矢腕章をつけているのが特徴である。

信者と呼ばれる人々がいる。

東風谷早苗の歌を愛する者たちだ。

触れるのはスタンプ集めの結果のみで、普段は触れず、見守るスタンスである。

彼らは守矢神社を信仰しており、布教活動を自主的に行うのだ。

また、神社への奉納品も忘れない。

賽銭である。

収入の少ないものは畑でとれた物を。

収入の安定しているものはお賽銭を。

それぞれの生活にあった奉納品を納める。

また、賽銭を納めると東風谷早苗が笑顔でお礼を言ってくれる。

そのため、収入の少ないものは必死に働き、稼ぐのだ。

神社コンサートには人間以外の存在もいる。

音楽を楽しむもの、宴を楽しむもの、嫉妬するものなど様々な妖怪がいる。

妖怪の目的は酒であつたり、帰り道の人間を驚かせて楽しんだり、さまざまな楽しみ方をするが、人間を襲うことはなかった。

それは、神がいるからである。

それも、信仰を集めた為か、莫大な神力を発する神が人を襲うことはならぬと宣言したからである。

幻想郷では妖怪と人間が共存している。

故に、人間を襲う妖怪も少なからず存在する。

しかし、妖怪がゆえか、禍々しい神力を持つ神の言葉を無視することとはできなかった。

●

森近霖之助は自分の店を趣味で経営しているようなものである。

閑古鳥が鳴く古道具屋にある日訪れた客があり、声を通すマイクと音を拡張するアンプなどを購入した。

道具の名前と用途が判る程度の能力の通り、それらの名前と用途は知っていたが、何をどうすれば動き出し、動き出すのに何が必要なのか分からなかった。

それらを購入し、満足した様子を示した客に思わず話しかけたのだ。

「使い方がわかるのか？」

「あ？ ああ」

つまり、彼は外来人の可能性が高い。

外の世界の商品を扱うのができるのは外来人だ。

彼は急ぎの用事ではなかったらしく、話し込んでしまった。

何でも、守矢神社で使うらしく、その為に色々働いているらしい。

ついでに参加と宣伝を頼まれたが、数時間に及ぶ僕の話に付き合っ

てくれたお礼と、快く受けた。

そして、当日に、驚いた。

人と、妖怪が混在した人集りもそうだが、

「機械？ それも高度な技術だな。なんだ、この河城にとりっばい印は？」

「そりゃあ、にとり達に協力して貰ってるし。きゅうりはどうかね？」

発電設備に、蓄電器、変電設備まである。

それらの機械周辺に河童たちがきゅうり片手に調整を行っていた。旨いな、このきゅうり。

「河城にとりと知り合いか、旅をしていたと聞いたが、なかなか知り合いが多いようだ」

氷の妖精は飲み物を冷やしているし、妖怪が露天屋台をしており、焼鳥やウナギなどを売っている。

演奏はプリズムリバー三姉妹か、妖怪だな。歌い手は人間の東風谷早苗か。

なんとも、幻想郷らしい光景だ。

●

東風谷早苗は戦慄していた。

こんな簡単に信仰が集まる。

今までの地道な活動が実を結ぶという喜びと、それに比例した信仰の集まりに驚き、震えた。

幻想郷入りする前、ニユースで神社でコンサートをするアーティストがいたのを知っていたが、まさか自分がそれを行うことになるなど、思ってもいなかった。

信仰がそのまま力になる神様二人は、まさしくその神に相應しい力と、威厳を持っていた。
が、これは为什么呢？

食卓で八坂様、洩矢様があり、その間に男性がいる。
ツムグさんだ。

並ぶ料理は彼が作ったもので、

「うまいなあ」

「ああ、うまいなあ。酒もうまい、飯もうまい。信仰も集まる。言うこと無いね」

食後にも、

「洋菓子かあ。ほんのり甘く、香りづけに、これは洋酒か」

「ケーキと言うものは初めてだが、うまいじゃん」

幻想郷でデザートを食べる神二人。

片方はグダーと、寝転がって、どこから仕入れたのか、マンガを読んでいた。

もう片方は、何故か、ルービックキューブをしていた。

洗い物や、掃除洗濯まで彼が行なっており、助かるのだが。下着まで任せきりで。

信仰心が……。

自室ではダメダメです。

「それで、ツムグさんは今まで幻想郷を周っていたんですか」

今までのツムグさんの話を聞いていた。
力を分け与える程度の能力、それがツムグさんの能力らしい。

「供給できる”力”は、試した所、殆ど何でも”力”が付けばできるみたいだよ？ 神力も試してみたらできたし、信仰力はできなかったけど。求心力はできたから、二度目のコンサートには今回参加してくれた人達は次も来ると思うけど」

反則ですね。その能力。

欠点は自分自身に力の供給ができないことですね。
思うに、彼がここに居続け、能力を使ってくれるのなら、信仰心は幻想郷全てに広まるでしょうね。
それを、見抜いた八坂様、洩矢様、流石です。

「アンケート用紙ですか、コンサートを週何回して欲しいか……ですか。殆ど、毎日に丸が付いてますね」

●

「来賓にあの蓬莱山輝夜が？」

八坂神奈子は驚いた。

引き籠りの姫がねえ。

よく、永琳が許可したものだ。

「てゐがこの前のコンサート見に来てて、今度は輝夜も誘ってみればって言ったところになった」

旅をしていたと話を聞いていたが、永遠亭の辺りは迷いの竹林があ

り、結構危険なんだがなあ。

「まあいいじゃないか。信仰は何者も拒まない。ま、私はどうでもいいけどね」

どうでもいいけど、と言いながらツムグを見るのは、アレだ。
狙ってるのか。

対するツムグは、

「あれ？ 諏訪子が眼の前にいるのに、後ろから声が聴こえるだど？」

ツムグの前にあるのは諏訪子の帽子である。

「諏訪子さん、諏訪子さん。どうして今日はそんなに小さいの？」

地べたに置いてある帽子にツムグが話しかけていた。

「諏訪子さん、諏訪子さん。どうして今日はそんなに大人しいの？」

「それはね。アンタの目が腐ってるからだよ！」

打撃音が響き、障子しょうじを突き破り、境内へ投げ出された。

ツムグは好きだなあこのやり取り。

諏訪子の帽子を何故か、諏訪子本人だと認識するというボケが気に入りのようだ。

● 「諏訪子、障子とか修理しとくように」

「神と同じ卓に付き、晩酌をするのは長く生きてるけど、初めての体験ね」

「姫さま、お泊りになりますか？」

蓬萊山輝夜と八意永琳である。

コンサート後、夕食に呼ばれ、断る理由もなかったので来たのであった。

八意永琳は思う。

断れ！

「そうね。やめておくわ」

ホツとする。何故泊まらないのかと聞こうと思ったが、なるほどね。洩矢諏訪子と八坂神奈子の視線が、全てを物語っている。

強い視線だ。

だが、

「ツムグを気に入りましたか、私達のように」

牽制、しておくだけしておこう。

彼は心地の良い存在であるが、それは猛毒にもなる。

「言葉が過ぎるわ。永琳」

注意された。続き、

「気に入ったのではなく、愛しているのよ？」

わかってるの？ という口調で。頬を染めて。熱のこもった視線で。ツムグを舐めるように犯した。

「はいはい、嬉しいなあ。愛されて」

躲かわされてますよ。輝夜様！。

「相変わらず、ね。元気そうで何よりよ。あまり、やり過ぎると、博麗の巫女にまた、ドヤされるわよ。そうね。その時はまた、私の所に来なさい。永遠に匿ってあげるわ。今度はしっかりと準備をしてね。そして、ツムグは私を犯せばいいわ。素敵！」

「おい、永琳」

「はい、わかってるわよ。えーと、お薬はつと」

頭を正常に戻す薬を投与した。

ツムグの事になると輝夜様はちょっと頭がおかしくなる。

それはそれで、愛らしく、乙女のように可愛いのだが、長く続けると、本当に発言を実行しようとするので、薬で正常に戻すのだ。

「また、誘ってくださいね。それと、こちらにも遊びに来てくださ
いね」

●

始まりがあれば終わりがある。

洩矢諏訪子は終わりが近いことを感じていた。

博麗の巫女が動き出した。

監視役のカエルからの報告だ。

ツムグの事を想う。

いい拾い物をしたと始めは思った。

次に、自分達を知る、珍しい人間だと思い、興味が湧いた。

感心したのは、能力であり、信仰を集める手段と結果であった。

私を子供扱いする時があるが、冗談であり、本当は尊敬、敬っているらしい。

彼は私の話、つまりは歴史の話が好きらしい。

どうも、妖あやかしや、その類たぐいの話に興味があるのだ。

私と神奈子の昔話を聞いた後、静かに頷き、感謝を述べ、彼は笑ったのだ。

「忘れられるというのは、悲しい。けど、俺は忘れない。幻想郷こゝろには沢山同じような奴がいるけど、その全員の事を刻む。書物にして残すか、阿求もしてるけど、俺は冒険記風にして違いをつけて販売してみるか。売れるかは別として。うん、それがいいな」

後半の事はほうっておいて。この時からだろうか。

意識し始めたのは。

もちろん、男性として。

子をなすか、久しい女の感情を思い出し、少し濡れた。

神奈子、早苗も含めて孕ませてもらったら面白いかなあ。

こういうものは惚れさすのがいい女というものだ。

まずは女を意識させるために、触れ合うか。

ん？ 神奈子が私を見ているが、コレはちょっと話しあう必要があるね。

戸惑っているのか。初々しい。

●
夢は終焉を迎え、目を開ける先に見えるものは何か。

●
配点：（記録）

第九章 閉鎖内の権力者（後書き）

予約投稿は便利だと気づく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7538y/>

境界線上の幻想郷

2011年11月29日12時48分発行